

ジャイナ教の禅定について：裸行派の禅定を中心として

松濤, 誠廉

<https://doi.org/10.15017/2543258>

出版情報：哲學年報. 23, pp.59-90, 1961-09-20. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：



ジャイナ教の禪定について

——裸行派の禪定を中心として——

松 濤 誠 廉

禪定は印度の宗教と哲学に於て重大な地位を有するものである。その存在はアーリアン人種侵入以前からあったことが認められ、始終一貫して印度文化全般に影響をあたえてきたことは周知の事実である。ジャイナ教に於ても禪定は修行の中心をなすものであるので、ここにジャイナ教に於けるその地位と発展とを見て行き、これを婆羅門の瑜伽派と仏教との比較に於て研究を試みようとするのである。

吾人がここにジャイナの禪定を研究するに当って裸行派の文献を主として用いる主な理由は、この派は白衣派と違って、古い文献をはやく失ってしまったために、一般教学に於ても特種な発達をしたと同様に禪定に於ても白衣派にない発展を見せ、それが仏教等の他の宗教との比較に於て非常に興味があるからである。

禪行派は次の三種類の禪定を伝えている。

Dhyāna I 類

1. Ārta Dhyāna
 - (a) Iṣṭa-viyoga
 - (b) Anīṣṭa-saṃyoga
 - (c) Vyādhi-pratikāra
 - (d) Bhoga-nidāna
2. Raudra Dhyāna
 - (a) Hīṃsānanda
 - (b) Mr̥ṣānanda
 - (c) Steyānanda
 - (d) Viśaya-saṃprakṣaṇānanda

3. Dharma Dhyāna (a) Ājñā-vicaya
(b) Apāya-vicaya
(c) Vipāka-vicaya
(d) Saṁsthāna-vicaya
4. Śukla Dhyāna (a) Pṛthaktva-vitarka-vicāra
(b) Ekatva- vitarka-vicāra
(c) Sūkṣma-kriyāpratipāti
(d) Vyuparata-kriyā-nivṛtti

Dhyāna Ⅱ類

1. Abhyantaradharma Dhyāna
2. Bahiraṅgadharma Dhyāna
3. Śukla Dhyāna

Dhyāna Ⅲ類

1. Padastha Dhyāna
2. Piṇḍastha Dhyāna (a) Pārthivī Dhāraṇā
(b) Āgneyī Dhāraṇā
(c) Mārutī Dhāraṇā
(d) Vāruṇī Dhāraṇā
(e) Rūpavatī Dhāraṇā
3. Rūpastha Dhyāna
4. Rūpātīta Dhyāna

以上は Nemicaṇḍra の Dravyasaṁgraha とその Brahmadeva の註 Vṛtti とに現れている Dhyāna を整理して出したものである。この中第Ⅰ類は白衣派でも古くから認めている所で、例えば Sthānāṅga, Aupapātika-sūtra にも見えているし、同派の認める Umāsvāti の Tattvārthādhi-gama-sūtra とその Bhāṣya にも出ているものであるが、第Ⅱ第Ⅲ類は白衣派独得のものである。以下その内容を見よう。

第Ⅰ類の *Dhyāna* は白裸両派共に苦行の最高の行と認めるものであって、それを説くに当っては、修業に害あるものでも禪定と名けられるものは之れを入れて説くのである。即ち Śubhacandra の著 *Jñānārṇava* (25, 20—22) に依ると、

(20) *Ārta* と *Raudra* の区分によって人々には二種類の悪禪定がある。また *Dharma* と *Śukla* の区分によって称讃の禪定が二種説かれる。

(21) この中 *Ārta* と *Raudra* との二つの悪禪定は非常な苦を与えるもので、それと異なる *Dharma* と *Śukla* との二つは業を根絶する力がある。

Tattvārthādhigama (IX 29, 30) にも同様なことが見られて、修行の綱目を説くところに有害な禪定をも同時に挙げることは問題ではあるが、害あるものもその性質が禪定であると言う理由で一般禪定論の内容としたと見れば、ジャイナ教の徹底さが見えて注意すべきことである。

1. *Ārta Dhyāna*

Dravyasaṃgraha-vṛtti, p. 86, l. 26 に、

「*Ārta Dhyāna* は四種である。望ましきものと離れること、望ましからぬものと合うこと、病の治療と享楽の欲求 (*bhoga-nidāna*) とに於て起る強い願望の状態のもの (*vāñcchā-rūpa*) である。それはまた種々なる程度に於て、*Mithyādr̥ṣṭi* 等の六の *Guṇasthāna* に位する人々に起るものである。(*Guṇasthāna* については後述する)。これは諸邪見者が畜生道に入る縁であろうとも、(畜生道に対して) 寿業を結んだ者を除いて、正見者達が(畜生道に入る縁とは) ならない。自己の清浄我を対象とする勝れた思索 (*bhāvanā*) の力によって、その縁たる雑染 (*samkleśa*) が何もないからである。」

Jñānārṇava (25—24)

「さて Ārta は害された者の存在状態で有身者等の有する悪禪定 (durdhyāna) である。方角に暗いが故に (起る) 興奮状態にひとしく、無明の熏習力より (生ずる)。

始めのものは望まれざるものと合うことより起り、同様に次のものは望ましきものが去ることより、第三のものは激しい怒から、第四のものは来世に対する願望 (nidāna) から生じ、諸々の有身者の有するものである。」

とある。この禪定はこれより古いと思われる白衣派の Aupapātika-sūtra にも見えている (Leumann's edition, p.42, Suttāgama II p.11, 23)。

「Ārta Dhyāna は四種あるものとして説かれる。即ち (a) 不快なものとの結合に関係し、また、それから離れようとする念に附随するものである。(b) 快きものとの結合に関係し、また、それから離れざらんとする念に附随するものである。(c) 病 (ātaṅka) との結合に…… (a と同じ……)。(d) 快である愛楽 (kāmaḥoga) との結合に…… (b と同じ……)。

Ārta Dhyāna には四種の相が説かれる。即ち (α) 悲歎, (β) 悲痛, (γ) 泣涕, (δ) 哀悼である。」

これは裸行派のものと相異があるが、白衣派が認める Umāsvāti の Tattvādhigama-sūtra (IX 31—35) には

- (31) Ārta は不快のものとの結合に於て、それと離れる為めの念の願望 (smṛtisamanvāhāra) である。
- (32) また (不快の) 感覚との (結合) …… (以下31と同じ)。
- (33) 快なるものについては (上のものとの) 反対,
- (34) 未来の生に於ける強い願望 (nidāna)
- (35) この禪定は不節制と一部節制と自制に放逸なるものに起る。

以上挙げた説明には多少の相異があるが、これを一言にして云えば迷妄の我々が人生苦の生活中に起す色々な強い欲求願望と同時に発生する心の

一境性である。

2. Raudra Dhyāna

Drav° Vṛtti (p.87, l.3) に

「次に Raudra Dhyāna がのべられる。害の歓喜と、妄語の歓喜と、盗の歎喜と、対境の保存の歓喜より生ずるのが Raudra で四種である。程度の相異をもって Mithyādr̥ṣṭi 等の五つ（原文 pañcama とあるは pañca の誤り）の Guṇasthāna にある生類に生ず。これはまた Mithyādr̥ṣṭi の者達の地獄の趣の原因なるも、寿業をのぞいては、正見あるものにはその（地獄の）因はない。それはまた如何なる理由かと云えば、（彼等正見者にとっては）生来の清浄我の真理がその所取の境であり、勝れた差別智の力によって、その（地獄の）縁たる激しい雑染がないからである。」

Jñānārṇava (26, 1—3)

「(1)恐暴な心の状態で、また恐しいのが Raudra Dhyāna で四種ある。（これが）説かれつつあるを、一切衆生に無畏を与える諸々の聖者は知れ、(2) Rudra (神) は心残忍な生類で、真理を見る人によって引用されたのである。或は Rudra の行為の状態 (karmabhāva) が Raudra であると述べられる。(3)害の歓喜と、妄語の歓喜から、偷盗から、また確保 (saṃrakṣaṇa) から人々には明かに四種の Raudra (Dhyāna) が生ず。」

Aupapātika-sūtra, Suttāgama II, p.11, l.29.

「四種の Raudra Dhyāna が説かれる。害に関係するもの、妄語に関係するもの、盗に関係するもの、確保に関係するものとである。Raudra Dhyāna には四種が説かれる。即ち起きたる敵意、多くの敵意、無智の敵意、死の終りにいたるまでの敵意とである。」

これを要するに、Raudra Dhyāna はジャイナの四戒に反する悪業をな

す時、心が一境性になるを云うのである。

3. Dharma Dhyāna

Drav° Vṛtti (p. 87, 1. 8—)

「更に次の Dharma Dhyāna は Ārta と Raudra の完全な捨を相とし、Ājñā=Apāya=Vipāka=Samsthāna-vicaya の四名目に区分され、程度を異にする増長の順により、Asaṃyata-saṃyagdr̥ṣṭi (第四位)、Deśavirata (第五位)、Pramatta-saṃyata (第六位)、Apramatta (第七位) と云う名の四 Guṇasthāna に居る (諸々の) Jīva に生ずるものである。直接には福を結ぶ原因であり、間接には解脱の原因であると説かれる。」

Jñānārṇava (27—1—3)

「次に静寂に依り、意 (manas) を自己のものとし、諸々の欲の享受に関しては離染にして Dharma Dhyāna を行い、智と離染を具え、自我を守護し、堅固なる心を有し、解脱を望み、努力する賢者は Dhātṛ として称讃さる。」

(a) Ājñā-vicaya

Drav° Vṛtti (p. 87, 1. 11)

「自己は緩漫な覚性にあつても、勝れた師が無くとも、また Śuddh-ajīva などの語義が微妙であつても “Jina が述べた微妙な言葉は如何なる原因によつても破壊されず、知成就のもの (ājñā-siddha) である。これを得なければならぬ。諸々の Jina は真理と異なる説をなすものではない” と云う偈の述べるように Padārtha (教説の句義) を確実ならしめるのが Ājñā-vicaya-dhyāna である。」

Jñānā° (33—6)

「一切智者の知に適應することによって、事実真理 (vastu-tattva) である自己の經典内容が考えられる時、これが Ājñā-vicaya と思われ

る。」

以上によりこれを一言にして云えば Ājñā-vicaya は Jina の教説の偽りないことを信じて Padārtha に心を集中することである。

(b) Apāya-vicaya

Drav° Vṛtti (p. 87, l. 15) によれば、

「別無別の三宝（正見と正知と正行）の修習 (bhāvanā) 力によって、何時、我々や他の人々の業の離 (apāya) 即ち滅 (vināśa) があるであろうかと云う思考 (cintana) が Apāya-vicaya である。」

Jñānā° (34, 1)

「賢者達がその (Dhyāna の) 中にあって業の捨と捨の方法とをも含めて憶念するものである Apāya-vicaya と云う Dhyāna を智者達は説く。」

Jñānā° は憶念といい、Drav° Vṛtti は思考としているが、業縛の捨離を対象内容とする禪定である。

(c) Vipāka-vicaya

Drav° Vṛtti (p. 87, l. 17)

「Śuddha-niścaya の理からすれば Jiva は浄不浄の業果をもたぬものであるが、過去以来無始の業縛の力によって悪が顕現し、それによって那落等の苦の Vipāka (異熟果) を受ける。また善 (puṇya) の起ることによって天等の安楽の異熟果を受取る。この Vicāraṇa (思考) が Vipāka-vicaya である。」

Jñānā° (35, 1—2)

「有身者の自己の業果から起り、毎瞬生じ、種々な様をとるものを Vipāka (異熟) と知るべし。有身者達の業より生ずる果はこの世に於て決定して成就せしめて種々異なる Dravya 等の四 (Nāma, Sthāpana, Dravya, Bhāva) のものを与える。」

これを簡単に云えば、衆生の業と業果の関係を思慮の中心とするのが

Vipāka-vicaya である。

(d) Saṃsthāna-vicaya

Drav° Vṛtti (p. 87, l. 19) には簡単に、

「前述せる世間の随観の思考が Saṃsthāna-vicaya である。」とし、
Jñānā° (34, —174) には、

「ああ、この全世界は解脱者 (Kevala-jñāna) の対象である。これを
区々分離し或は綜括して自己の力によつて行者は考うべし。」

即ちこれは世界を対象とする Dhyāna である。

以上引用した Dharma Dhyāna に関する文献はいづれも裸行派のものであるが、白衣派に伝わる Aupapātika-sūtra (Suttāgama II, p. 12, l. 1) には次の如く説いている。これは先に引用したものより古いものであるのみならず、それが必要とする内容が分類して附加されているのは注意に値する。

「Dharma Dhyāna は四種四様に説かれる。即ち Ājñā-vicaya と Apāya-vicaya と Vipāka-vicaya と Saṃsthāna-vicaya とである。法に関する Dhyāna には四相が説かれる。即ち、知に関する信と、出離に関する信と、教説に関する信と、經典に関する信とである。法に関する Dhyāna には四つの所縁が説かれる。即ち、語説と質問と説明と法話とである。法に関する Dhyāna には四つの随観 (anuprekṣā) が説かれる。即ち、無常随観、無常依所随観、孤独随観と輪廻の随観とである。」と。

ここで Dharma Dhyāna を綜括してみるならば、世間の生活のうちに起る Ārta と Raudra から離れて Jaina の教法を対象とする思考或は思考による念の集中、即ち一境性がそれである。この場合、心の集中の程度、即ち強さや純粋度などは少しも考えられていない。尚 Jaina は十二の Anuprekṣā を説き、この中に上に引用した Aupapātika の個所に述べてある無常随観等の四つもふくまれているのであるが、これと Dharma

Dhyāna との別が判然としない。また Dharma Dhyāna に説かれる四随観が古いもので、これが後に増加されて十二随観になったものであろうと考えられるし、見様によっては第一の Dharma Dhyāna である Ājñā-vicaya は第十二の Dharmānuprekṣā に、第二の Apāya-vicaya は第八の Saṃvarānuprekṣā と第九の Nirjarānuprekṣā に相当し、第三の Vipāka-vicaya は第三の Saṃsārānuprekṣā に、第四の Saṃsthāna-vicaya は第十の Lokānuprekṣā に相当する。また実習上からいっても Dharma Dhyāna と Anuprekṣā の相異は疑問とせねばならない。(Anuprekṣā については Drav° Vṛtti, p. 42—62 ; W. Schubring, Die Lehre der Jainas § 175 等参照)

4. Śukla Dhyāna

今までと同様裸行派の教典の説くところを引用すれば、Jñānā° 42-4 に、

“行動なく諸根を超越し、禪の持を離れて内に向きたる心を Śukla (Dhyāna) なりと述られる。(niṣkriyaṃ karaṇātitaṃ dhyāna-dhāraṇa-varjitaṃ / antarmukhaṃ tu yac cittaṃ tac chuklam iti paṭhyate //)”

「禪の持を離れて」と云うのは禪を行っている意識もないと云う位の意味であろう。上の偈文は全くよく禪定を定義したものと思う。Dr. Vṛtti には引用を要する内容はない、只 Śukla Dhyāna の四禪の名である (1) Prṥhaktva-vitarka vicāra, (2) Ekatva-vitarka-vicāra, (3) Sūkṣma-kriyā-pratipāti, (4) Vyuparata-kriyā-nivṛtti を挙げているのみである。

(a) Prṥhaktva-vitarka-vicāra

Jñānā° 42—9 には、

“第一の Śukla は vitarka を有し、vicāra あり、別異性を具するものであると述べられる。”

Dr. Vṛtti p.87, l.23 には、

“dravya と guṇa と の状態 (paryāya=Zustand 現状) から切離れている事が Prthaktva と云われ、vitarka と云うのは、自性清浄の我に随伴する相を有し、その属性は聞智 (bhāvaśruta) 或は聞智を云いあらわすもので、内に叙述をふくむ語であると説明される。欲求せざる転動 (vṛtti) によって他の物に変転すること、一つの言語から他の言語に変転すること、意と語と身の三 yoga (行動) に於て一つの yoga から他の yoga に変化することが vicāra (=vicāra) である。その意味は次の通りである。仮に禪定をなす人が自己の清浄我の samvedana (認識) を捨てて、外的思考をなさないとしても、自己の状態に於て確立性が無い限りに於て、望まざる転動 (vṛtti) によって心の変化 (vikalpa) が起る、この故に Prthaktva-vitarka-vicāra dhyāna と云われる。

こ (の禪定) は更に、Upāsama-śreṇi (煩惱の抑圧過程) の階位の説明に於ては、Apūrvopāśamaka (第八位)、Anivṛtṭyupāśamaka (第九位)、Sūkṣmasāmparāyaka u. (第十位)、Upāśāntakaṣāya (第十一位) に、また Kṣapaka-śreṇi (煩惱絶滅過程) の階位にあつては、Apūrvakaraṇa-kṣapaka, Anivṛttikaraṇa-kṣapaka, Sūkṣmasāmparāya-kṣapaka と名ける三 guṇasthāna に存在するものである。”

以上の説明によると、この禪定は今までのものとは異なり、禪定の対象よりは心的状態を中心に考えていることがわかる。また聖者の階位と関係して説かれていることは見落してはならぬ事で、これは後に言及するつもりである。Śukla Dhyāna の第一としての Prthaktva-vitarka-vicāra の特長は dravya や guṇa の paryāya から別立し、vitarka と vicāra の作用があることである。

(b) Ekatva-vitarka-vicāra

Jñānā° 42—10 によれば、

“vitarka を具し vicāra なく ekatva の語によって特長づけられる

のが、牟尼達が勝無垢なる第二の Śukla と述べるものである。”
然るに Dr. Vṛtti p. 88, 6 には、

“或は生得の清浄我の実体に、或は不変の我の安楽感の状態に於て、或は迷妄なき自認識 (svasaṃvedana) の属性 (guṇa) の (これ等三者の) うちのいづれかに転ずるもの (pravṛttam) がその同一の所に 於て vitarka と名くる自知相の bhāvaśruta の力によって堅固になり、vicāra なる guṇa-dravya の paryāya (現態) の回収をするもの、それが Ekatva-vitarka-vicāra と云う、Kṣīṇakaṣāya-guṇasthāna (第十二位) に存する第二の Śukla Dhyāna と呼ばれる。これによって Kevala 智が発生する。”

以上の説明によると、両者とも vitarka はあるとするが、vicāra に関しては Dr. Vṛtti はこれを guṇa-dravya-paryāya-parāvartana と説明し、Jñānā° は vicāra は無しとしている。尚 Śvetāmbara の Aupapātika-sūtra にも vicāra は無しとし (egatta-viyakke *aviyāri*), Tattvādhipgama IX 44 も avicāraṃ dvitīyam といって vicāra の無いことを述べている。恐らく Dr. Vṛtti は guṇa-dravya-paryāya の回収の作用と見て、その同じことを他のものは回収なるが故に vicāra は無いとしたのであるう。然し無しとする云い現し方がより古いものであることは勿論である。

(c) Sūkṣma-kriyā-pratipāti

Jñānā° 42—11

“Sūkṣma-kriyā-pratipāti は第三の名目で、その意義を有する名称である (名の通りの意義を有す)。”

Dr. Vṛtti p. 88, 10 以下に、

“ここに微細な身作 (kāyākriyā) が働いているもの、或はまたそれが発生していないもの (tadapratipāti) が Sūkṣma-kriyā-pratipāti と云う第三の Śukla Dhyāna である。またこれを行ずることによって Sayogikevali-jina となる (第十三位)。”

この Dr. Vṛtti の説明によれば、°kriyā-pra° と見、また °kriyā-’pr-ati° と見ることによって微細な身の活動が起ったり起らなかったりする と解釈する。これは勿論註釈者の苦肉の策ではあるが、微細な身活動のみ が間断して起る実状をよく現わしている。本来は °kriyā-pratipāti が正しい読み方であるのは云うまでもない。kriyā は yoga (活動) と同義に用いられている。要するに身口意三 yoga のうち身 yoga のみしか起らない禪定である。

(d) Vyuparata-kriyā-nivṛtti

Jñānā° 42—12

“等しく断切られた作 (kriyā) を有するものであると第四の Dhyāna を聖者達は説示した。”

Dr. Vṛtti p.88, 12

“この禪定の中に於て kriyā が非常に uparata した即ち寂止したのが、Vyuparata-kriya (kriyā が寂止したもの=禪定の形容詞) で、またその (Vyuparata-kriyā の禪定) の不寂止を有するもの (=tadānivr̥tti) 即ちそれを寂止せしめざるものでもある禪定と云うのが Vyuparata-kriyānivr̥tti と云う名の第四の Śukla Dhyāna である。”

即ち Dr. Vṛtti はこの禪定の名を Vyuparata-kriya と anivr̥tti の二形容詞の合成と見て内容を説明しようとするのである。この名の本来の起りは Vyuparata-kriyā であり nivr̥tti である禪定の意味である。従ってこの二語は別々の語で第四禪の同意語である。これを合成と見た所に説明上の困難を生じたのである。

この禪定は要するに yoga が完全に寂止した状態である。

因みに白衣派所伝の Aupapātika-sūtra (Suttāgama II p.12, 7) に

“Śukla Dhyāna は四種四様に説かれる。即ち 1. ……puhutta-viyakke sa-viyārī 2. egatta-viyakke aviyārī 3. suhuma-kirie appaḍḍivāī 4. samucchinna-kirie aniyatṭī である。Śukla Dhyāna には

四相が説かれる、即ち孤独と捨離と不動と不妄 (asammoha) とである。Śukla Dhyāna には四つの所縁が説かれる、即ち忍と解脱と正 (ajjava=arjava) と穩 (maddava=mārdava) とである。Śukla Dhyāna には四つの随観が説かれる。不幸 (avāya=apāya) の随観、不浄随観、無限転動の随観と転変 (vipariṇāma) の随観とである。”

(Sthāna 4, 1 Suttāgama I 224, 22 にも見えて居る、多少細目に順序の不同がある) これを上のもものと比較すると原始的教理の様相がよくわかる。(その他 Tattvārthādhigama IX 41—46 参照)

Śukla Dhyāna の心理的内容

ここではジャイナ教は心理的に禪定をどう見ているか、心理的に如何なるものが Dhyāna でその理想状態はどんなものであるかを見たい。

Dravyasaṃgraha 第55偈に

jaṃ kiṃci vi cintanto ṇiriha-vittī have jadā sāhū /
laddhūṇa ya eyattaṃ tadāhu taṃ tassa niccayaṃ jhāṇaṃ //

“Sādhu が欲求の転動なくして (nirihavṛtti), 何かを思考している場合, ekatva (唯一性) を得ているならば、それが niścaya dhyāna (決定静慮) である。

この ekatva を Vṛtti の作者 Brahmadeva は, ekāgra-cintā-nirodha 即ち一先端に於ける思考の停止と説明し、更に nirihavṛtti を niḥspṛhavṛtti (願望の動きのなきこと) と説明している。更にそれ以下の文は種々興味があるので訳せば、

Dr. Vṛtti, p.95, 27

“次に細説すれば、何か心をその上に集中すべきものとは何を指すのであるか。(禪定の) 初歩のもの点から云えば、心の変化(vikalpa)の起る地位にあるのであるから、この場合、対境に対する kaṣāya (煩惱) をあざむく為めに、また心を堅固にする為めに五人の最勝の聖者等の最

勝の物 (dravya) が禪思さるべきである。後に反覆実習の力によって心が確立性を帯びてきた時には清浄覚一生得清浄の「我」の自性が禪思さるべきである。niḥspṛha (Dravya-Saṃgraha の原文では nirihavṛtti) の語によって、邪悪性、男中女の三性、笑等の六 (hāsyā, rati, arati, bhaya, śoka, dugañca), 怒等の四 (krodha, māna, māyā, lobha) の十四の内所得 (abhyantara-parigraha) 並びに土地、住処、金、銀、財、穀、奴、婢, kupa (金銀より劣等な金属) 器具と呼ばれる十種の所得も無いのが禪定者の自性であるとのべられる。また一点に思考を止めると云う語によって、前述せる種々な禪定の対象に於ける確立性、不動性が禪定の相であるとのべられる。この偈に云う niścaya の語は、初歩の者の場合には世間事上 (vyavahāra) の三宝に関する決定を意味し、yoga (行動) の起らない人の場合には清浄な行動意識 (upayoga 行動と共なって起るその意識) の特相によって現わされる ekadeśa-suddha-niścaya (一部清浄の決定) と理解すべし。”

以上によって禪定の対象は始めには必しも ātman に限ることを要しないことが明かであるのみならず、禪定者の生活態度や心の持ち方も見えて面白い。然しこの禪定も未だ真実のものではない。然らば最上の禪とは何か。

Dravyasaṃgraha の第56偈には

mā citṭhaha mā jampaha mā cintaha kiṃ vi jeṇa hoi thiro /
appā appammi rao iṇam eva paraṃ have jhāṇaṃ //

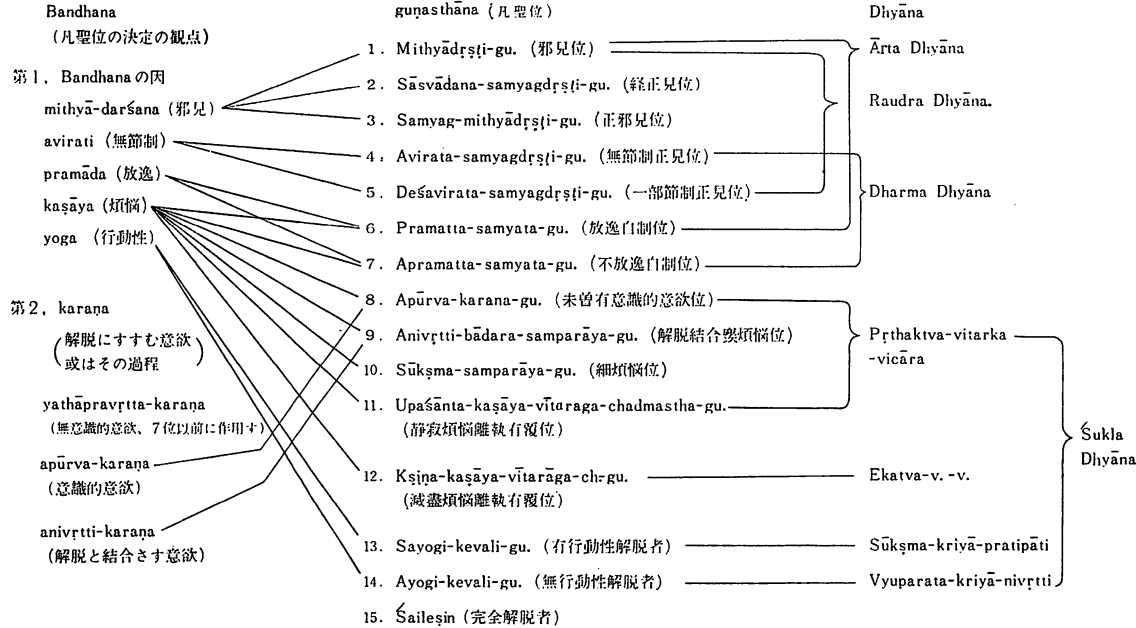
“汝等何事も行動する勿れ、云う勿れ、語る勿れ、思う勿れ、これによって確立が生ずる。そして「我」が「我」に傾注 (rata) しているのが最勝の禪定である。”

Vṛtti (p. 96, 17) の説明によれば、

“身口意の作業のみならず、その yoga をも止めて ‘確立あるもの’ となる。何が確立あるものとなるかと云うと ātman がなるのである。

(自我が) どう云う風に確立するかと云うと ‘appammi rao’ 即ち (1) 生来の清浄なる知見を自体 (svabhāva) とし, (2) 最勝我の真理に対して正信をもち, (3) 智に随行することを本質 (rūpa) とし, (4) 無別の三宝を体とする三昧より生ずる遍満の喜び (hlāda) を生ぜしめる安樂の享受に専念する (以上(1)―(4)は *nijātman* の形容), 生来の我 (*nijātman*) に *rata* している即ち完全に傾注している (*pariṇata*) 或はそれに没入している (*liyamāna*) それ (= *nijātman*) を心とし, それを素材として成立っている。この「我」の安樂を体とし, そのものから成っている状態が *niścaya* (決定智) から見た最勝の禪定である。この禪定に住する人々に離染最勝歡喜の安樂が輝くが, それが決定解脱道の自相である。”

これを要するに, 具体的な行動のないことは勿論のこと, *yoga* (身口意の活動性) もなくて, 自己の本来清浄な自我に没入して完全に一つになったのが最高の禪定で, これはまた同時に最高の解脱の心的状態でもある, と云うのである。この *Śukla Dhyāna* は後に示す如く, 仏教の四禪と起原を同じくするものであるから, 本来これ自体独立したものである。これが進んだ后世のジャイナ教では他の観点から作られた凡聖位と不可分の関係におかれ, 一定の聖位にあるものでなければ特定の禪定は修せられないかの如き感を与える様になったのである。これは上の *Vṛtti* の訳にも述べられている。これを図示すれば,



試みに Tatiya 氏の研究によって Dhyāna と階位の関係を示すに、第十一にある jīva は誰彼の別なく一度下位に落ち、上位に昇るものは業縛を減して (kṣapaka-śreṇi) 第十位 (sūkṣma-samprāya) から第十二位の Kṣīṇa-kaṣāya-vītarāga-chadmastha-gu. にのぼる。ここで Śulka Dhyāna の第二 Ekatva-vitarka-vicāra を修し、知覆、見覆、迷妄 (mohanīya) と障碍 (antarāya) との四つの有害業 (ghāti karma) をすべて減してしまい、そして第十三位の Sayoga-kevali-gu. にのぼる。縛の因の五つのうち始めの四つは完全になくなり、yoga だけを有して、vedaniya, āyus, nāma, gotra の四無害業 (aghāti karma) のみが存在している。ここで yoga を減する。その方法は始めに口と意の麁 yoga を身の麁 yoga で止滅し、次に身の麁 yoga と口と意の細 yoga とを身の細 yoga で消す。その後、Śukla の第三禪の Sūkṣma-kriyā-pratipāti (これには kāya-yoga のみある。Umāsvāti IX 42) を行じ、身の細 yoga をもってその同じものを消し、この禪定によって身を縮める。これから第四の Śukla Dhyāna 即ちこの禪定は kriyā が断たれ堅固で (anivartī) 山の岩の如く不動である。これが第十四位の Ayoga-kevali-gu. で、ここに彼は五瞬間の間とどまって無身の完全解脱者となる。

以上は Tatiya 氏の説明を要約したのであるが、この意味は上位の行者が夫々 Śukla Dhyāna を行じて更に上位にすすみ、ついに解脱すると云う意味であることは確かである。然し疑問とするところは Śukla Dhyāna の第二から以上は一般下位のものには完全に行ずることは不可能であるのか、行ずることは出来ても上位の者の如く直ちに解脱には入らないと云うのか、これは明らかでない。

然るに Jinabhadra の Dhyānaśataka 2 と 3 には (Mahārājendra に依る)

jaṃ thiraṃ ajjhasānaṃ taṃ jhāṇaṃ, jaṃ calaṃ tayaṃ cittaṃ |
taṃ hojjā bhāvanā vā anupehā vā ahava cintā || 2 ||

antomuhutta-mettaṃ cittāvatthāṇaṃ egavatthummi |
chaumatthāṇaṃ jhāṇaṃ joganiroho jīnāṇaṃ tu || 3 ||

堅固な合一は禪定である。動ずる三種の心は *bhāvanā* か随観か或は思考である。

一物に於ける一 *muhūrta* 以内の長さの心の止住は業の覆あるものにとつては禪定であり、諸の *Jina* にとつては *yoga* の滅である。
とある所を見ると、禪定は *Śukla Dhyāna* も一般の人が行い得るところで、*Jina* はこれを *yoga* を滅する為に用うと云う意味に解すべきである。

尚ジャイナ教では如何なる禪定でも続いて一 *muhūrta* 時間 (48分) 以上は出来ない、無理にそれ以上続けければ状態が変化してしまうとしている。若し同じ禪定を続けてやろうと云う考えなら、一 *muhūrta* が過ぎた時に新めて始めなければならないとしている。このことは如何なる理由によるのか分らないが、仏教や婆羅門系の瑜伽派でも説かないことである (*Tattvārtha IX 28*)。

またジャイナでは堅固な骨格 (*saṃphanana*) を有するものでなければ禪定は出来ないとしている。坐禅の坐法については *Hemacandra* の *Yogaśāstra IV120* 以下参照。

最後にジャイナの *yoga* (行動性) について一言すると、*Pañcasamgraha 721* には、*saśeśyaṃ viryam* (心的色調あるエネルギー) と説明するところによると、恰も仏教や婆羅門瑜伽派で説く *saṃskāra* の如く潜在的な心の動きの様に見られやすいが、ジャイナでは *yoga* のみを有するとされる *Sayogi-kevali* は総ての有害の業果は前位ですててしまつて、身体と寿と地位と感受と云う四つの無害の業しか残していないのである。この者が有する身口意の行動性が *yoga* で、業果の原因とならぬものとされているので、上に述べた潜在的な *saṃskāra* とは異なり、行動の現れを伴う活動性である。従つて *Śukla Dhyāna* で云う *kriyā* と異なるものではない。

Śukla Dhyāna と他教禪定の比較

ジャイナで説く Dharma Dhyāna は教理の信仰研究，実行に於ける心一境性を云うのであるから原始仏教でも四念処等これに類するものが多い。Dharma Dhyāna を凡聖位と関係して考えることも仏教で四諦十六行相の觀を煥，頂，忍，世第一法の四善根位と関係させて考えることと同類と云い得る。

次に Śukla Dhyāna について，始めに結論を云えば，これは仏教の四禪と完全にその本源を同じくするもので，これが教理の相異によって説明を異にするに過ぎないのである。即ち Śukla Dhyāna の第一は Prthaktva-vitarka-vicāra と名けられるもので，prthaktva は dravya と guṇa の paryāya から切離されている事，vitarka は聞智，vicāra は心の現象の移動で結局禪定の一境性に反する動きである。これに対して仏教の四禪中の第一は「初禪」とだけの名称で，他の三と同様その内容を示す名前がないが，その内容を Pāli の Saṃgīṭisuttanta (P. T. S. Dīgha. Vol. III p. 222) に見ると，

idh' āvuso bhikkhu *vivicc'* eva kāmehi vivicca

akusalehi dhammehi *avittakkaṃ avicāraṃ*

vivekaṃ pīti-sukhaṃ paṭhama-jjhānaṃ upasampajja viharati (ここに友よ，比丘は諸欲より離れ不善の諸法より離れ，vitarka あり vicāra ありて，離より生じ，喜と楽ある第一禪を具足して住する。)

とあって，離と vitarka vicāra が主要なものとなっていることがわかる。この離 viveka は，Śukla Dhyāna の Prthaktva と同意語と見られるものである。vitarka は，仏教では尋と訳して，物の全体認識，vicāra は何と訳して物の有する個々の属性の認識であるから意味内容は全然異なるにしても，Śukla Dhyāna と同語，同意語を有していると云うことは，これ等が同一本源から伝ったものであるとせざるを得ない。Śukla の第二は，

正しくは *Ekatva-vitarka-avicāra* と云う名で、その内容は行者の一つに限定された心転が聞智 (*vitarka*) によって堅固にされ、心現象の移動のない禪定と云う意味であるが、仏教では、次の如く述べる、

vitakka-vicārāṇaṃ vūpasamā ajjhataṃ sampasādanaṃ cetaso ekodibhāvaṃ avitakkaṃ avicāraṃ samādhijaṃ pīti-sukhaṃ dutiya-jjhāṇaṃ upasampajja viharati. (Mvp. に出ている Skt. によると *adhyātmaṃ samprasādāt ekotiḥbhāvāt* と Abl. (奪格) になっている) (尋と伺が寂するが故に内が清浄になる〔が故〕に、心が一つになる〔が故〕に、無尋にして無伺にして、三昧生喜樂の第二禪を具足して (比丘は) 住す。)

ジャイナが *vitarka* だけはあるとするのに反して仏教の伝は、この存在をも否定していると云う相異はあっても、*ekatva* と *ekotiḥbhāva* が共に心が一つになることを示している。

Śukla Dhyāna の第三は、*Sūkṣma-kriyā-pratipāti* と名けられ微細の身の *yoga* のみがまだ存在する禪定の意味であるが、仏教では、次の如く述べる、

pītiya ca virāgā upekhako ca viharati sato ca sampajāno sukhañ ca kāyena patisaṃvedeti, yaṃ taṃ ariyā ācikkhanti—‘Upekhako satimā sukha-vihārī ti’ tatiya-jjhāṇaṃ upasampajja viharati. (喜より離染するにより捨にして住し、正念正知にして樂を身を以て感じる、これを聖者達はかく述べる“(彼は) 捨に住し正念にして安樂住なりと”。この第三禪を具足して (比丘は) 住す。)

この二つを比較すると、ジャイナの方は *kāya* の *yoga* のみ存するとし、仏教には身によって安樂を感じるとする所に、内容はともかくとして言葉上的一致があるので、全然別個で無関係のものとは云えない。

Śukla Dhyāna の第四は完全に *yoga* のなくなった *Vyuparata-kriyā-nivṛtti* と名けられるものであるが、仏教の四禪は次の如く述べる。

sukhassa ca pahānā dukkhassa ca pahānā pubbe va somanassa-

domanassānaṃ atthaṅgamā adukkhaṃ asukhaṃ upekhā-sati-parisuddhiṃ catuttha-jjhānaṃ upasampajja viharati. (楽を捨てるが故に、苦をも捨てるが故に、また以前に諸の快・不快が消滅しているが故に、不苦不楽にして捨念清淨の第四禪を具して住す。)

ジャイナから云えば、身の *yoga* もなくなり、身体を滅して完全解脱の一步手前で、生得清淨の自我と完全に一つになっている状態だから、仏教の述べる状態と殆んど同じであると考えてよいと思う。

仏教では一般に四禪を色界の禪定とし、これを最高のものとはせずに、その上に無色界の禪定として、空無辺処、識無辺処、無所有処、非想非非想処の四つを立てる。然し所謂無色界の四禪定も、夫々別個のものであるばかりでなく、四禪とは本来関係のあるものではない。これが一つにまとめられて実際の色界無色界の両世界も同じ名を持つ様になったのである。然し仏教の中に四禪を最高のものと考えた派もなかったわけではない。大智度論第十七巻に、仏弟子中の一比丘が四禪を得て預流乃至阿羅漢果の四果を得たと思ひ増上慢を起して、その為めに地獄に落ちると云うことを仏陀が断言したと記載しているのは、大智度論の時代かそれ以前にこの説があったことを示すものである。馬鳴の *Saundarananda* の説並にこれと関係ある起信論も四禪比丘と同じ考えの様である。(拙稿瑜伽行派の祖としての馬鳴 大正大学研究紀要 39, 1954 参照)

また仏教で四禪を尊重し、ジャイナの考えと同様に、解脱涅槃に関係ありとするものに次のものがある。即ち *mahāparinibbāna-suttanta* (P. T. S. *Dīgha*. Vol. II 156) ch. VI 8 に、涅槃される時仏陀は第一禪に入られ、それから順次に第二第三第四と経て、次に無色界の禪定の空無辺処、識無辺処、無所有処を経て非想非非想処定に入り、これから出て想と感覚の滅 (*saññāvedayita-nirodha*) に入られた。その時阿難が阿那律に“仏は涅槃されましたか”と聞くと阿那律はこれを否定した。(9)次に仏は *saññā-vedayita-nirodha* から出て非想非非想から順次に下って空無辺処定から出

て、第四禪に入りそれから順次の下って初禪に入り、それから出て再び二三と入って、最後に三禪から出て四禪に入り直ちに涅槃された。これは四禪を行じ、第四禪に入って涅槃寂静に達すると云うこと、換言すれば第四禪の状態が涅槃に一番近いと云う説が仏教にもあったことを意味するもので、これは確かに四禪尊重の考えである。ジャイナが Kevalin が最高解脱に達する時、Śukla の第三第四を行ずるのと同じ考えである。

Śukla Dhyāna や四禪と同じ流れをくむものに、婆羅門系の瑜伽派がある。即ち Patañjali の Yogasūtra I. 17 に於て、有想三昧 (saṃprajāta) を説明するところで

Vitarka-vicār'ānandāsmitā-rūpānugamāt saṃprajātaḥ (尋と伺と喜と我識と云う対象 (rūpa) に随従するが故に有想三昧である)

の説明で、Vyāsa は Bhāṣya の中で “vitarka とは心が自分の所縁に関して行ふ龐大な享受 (ābhoga) で、vicāra はその微細なものである。ānanda (喜) は、幸福感 (hleda) で、一我的感受が asmitā (我識) である。その中、第一のもので、これ等四つに随われるものが Savitarka samādhi 有尋三昧である。第二(の三昧)は vitarka を欠き、有伺のものである。第三(の三昧)は伺を欠き喜を具するものである。第四のものはそれ (=喜) を欠き asmitā のみ有するものである。以上これ等総てのものが有縁の三昧である。”

この有縁の三昧 (sālambanāḥ samādhayaḥ) が有想三昧のことで、これに対して先に述べた saṃskāra のみを有するのが無想三昧で、有想よりも高位で、更に saṃskāra がなくなったのを無種子三昧 (Abija-samādhi) と云い最高のものであるが、この名に対して前のものを Sabija-samādhi 有種三昧と云うのである。

吾々の問題は Vyāsa の Bhāṣya の中に Śukla Dhyāna 乃至は四禪の形が出て来ることである。そして vitarka vicāra の意味はまた前のジャイナや仏教の取り方と異っている。ānanda は仏教にあるし、asmitā はジ

ジャイナの方の Jaina Śvetāmbara の jīva 乃至は Digāmbara の ātman に同じもので、第四の有想三昧に於て asmitā のみ残ると云うのは、Sukla の第四で自己が自我に没入する状態と見ることが出来る。Yoga の方では更にこの上に saṃskāra の無い無種三昧を説くとしても、ジャイナの方では Sukla の第四は Ayogi-kevali のなすもので、これによって最後の業を捨てて無身になって世界の最高所に於て三昧に住しているのであるから、この最高所での三昧が瑜伽派の Abījasamādhi に相当するものであると云えるであろう。ジャイナはただ伝統によって前の四つに止って、これを説かないだけである。

因みに、仏教の四禪は禪定一般の深浅を示すもので、云はば禪定の深さを計る尺度の様なもので、その中には禪定を行うための対象も与えられてなければ、方法も説かれてないと云うことは三十年以前に大学卒業論文中に指摘した通りである。

II 類 及 び III 類 の 禪 定

Dravyasaṃgraha Vṛtti は更に次の如く述べている。

“更に具生清浄の最勝心 (parama-caitanya) 有って、深歓喜に包まれている、尊い生得の我について、内我の説 (adhyātma-bhāṣā) に依って、当然所得すべき智 (buddhi) を作ってから後に「自己 (aham) は無遍知であり、自己は無遍楽である」と云うことを思索 (bhāvanā) の内容とするのが内法禪 (Abhyantara-dharma-dhyāna) と名けられる。さらに五聖者に対する深信 (bhakti) とそれに随順する清浄な行 (anu-ṣṭhāna) が外法禪 (Bahiraṅga-dharma-dhyāna) である。また自己の清浄我についての無虚妄の三昧をその相とするのが Sukla Dhyāna であると云う (以上 II 類の禪定)。或はまた「Padastha とは mantra (咒文) の語に拠るもので、Piṇḍastha とは自我 (svātman) の思考 (cintana) である。Rūpastha は一切知者を内容とするもの (sarvavid-rūpa)

で、Rūpātita とは無染 (nirañjana) のものである」と云う偈に説かれた次第によって種々な禪定を知るべし (以上Ⅲ類の禪定)。”

これでこの論文の当初に挙げた所謂Ⅱ類とⅢ類の禪定があることになるが、以下これ等を研究してみよう。

(A) Ⅱ類の禪定

これはⅠ類の禪定に説かれた Dharma と Śukla の両禪定とは異った観点から禪定を区分して前と同じ Dharma と Śukla の名を附したものである。表にすれば次の如くである。

Dharma Dhyāna		Abhyantara-dharma-dhyāna (生来の自己を対象とする)
		Bahiraṅga-dharma-dhyāna (五聖の信を中心とする禪定)
Śukla Dhyāna		(自己の清浄我に対する無虚妄三昧)

これは要するに Dharma と Śukla の語を前とは別の意味に解釈して Dhyāna を考えたもので Dharma を内法と外法に分ち、Śukla を清浄なもの、即ち本来不変の清浄我と解釈して、その禪定法をまとめたものである。

この中 Abhyantara-dharma と Śukla の二つは婆羅門教理化した裸行派独自の教理に立つものであるが、仏教の心清浄説並に如来蔵思想のものとも非常に似ていることに留意せねばならぬ。また Bahiraṅga-dharma-dhyāna は婆羅門系の瑜伽派が解脱人格としての Īśvara に対する信仰を禪定の成就と結びつけた (Yogasūtra I, 23 ; Īśvarapraṇidhānād vā) と同じ傾向のもので、人格に対する信仰と禪定と解脱の結びつきは仏教にとってもまた重大な問題である。その内容は Dravyasaṃgraha 50~54偈の説明によると Arhat, Siddha, Ācārya, Upadhyāya, Sādhu のすべての五聖者の相の思考を中心とする禪定である。

(50) 四つの害ある業を亡ばし、見と安楽と智と精進よりなり、清浄な身に住し、清浄な我 (ātman) である阿羅漢を思考すべし。

(51) 八種の業身を滅し、世間非世間の智者であり、観察者であり、世間の頂上に住し、人間の形をなす Ātma なる Siddha が禪思さるべし。

(52) 見と智との勝れた、勇猛と行と勝苦行の修行に自己と他を与からしめる Ācārya 牟尼が禪思さるべし。

(53) 常に三宝（正見正智正行）をそなえ、説法に熱中し、行者の最勝牛王である Ātma が Upadhyāya である。彼に帰命あれ。

(54) 解脱の道である、見と智の総体と常に淨い行を成就するのは Sādhu 牟尼である。彼に帰命あれ。

(B) III 類の禪定

当初に表示したようにこの禪定は、1. Padastha 2. Piṇḍastha 3. Rūpastha 4. Rūpātita の四つに分かれ、更に 2. Piṇḍastha が (a) Pārthivī (b) Āgneyī (c) Māruti (d) Vāruṇī (e) Rūpavatī の五つの Dhāraṇā に分かれるのである。以下この順に見ていこう。

1. Padastha Dhyāna.

Padastha は上の śloka の説明の通り mantra (呪文) を対象とする Dhyāna である。即ち Dravyasaṃgraha 49偈に、

「Parameṣṭhi を意味する 35, 16, 6, 5, 4, 2, 1 とその他のものを師の教えによって繰返し誦し禪思せよ」

Vṛtti はこれを説明して

「35と云ふのは、“*ṇamo arihantāṇaṃ, ṇamo siddhāṇaṃ, ṇamo āyariyāṇaṃ, ṇamo uvajjhāyāṇaṃ, ṇamo loe savva-sāhūṇaṃ*” (阿羅漢に帰命す、成就者に帰命す、阿闍利に帰命す、和尚に帰命す、世間中の一切の Sādhu に帰命す) の Pkt. で書かれた35シラブルの総ての Pada (語) を云う。16とは、“*Arihanta siddha āyariya uvajjhāya sāhu*” (阿羅漢よ、成就者よ、阿闍利よ、和尚よ、sādhuよ) の16シラブルの nāmapada 名詞の句が名けられる。6とは、“*arihanta siddha*” の6シラブルの阿羅漢と成就者の2名詞が名けられる。5とは、“*a si ā ū sā*” の各聖者の頭字

の五つが名けられる。4とは、“*arihanta*”。2とは、“*siddha*”。1とは、“*a*” 即ち *arihanta* の始めの *a* であるがこれか或は *om* の1字で五人の *Parameṣṭhi* の始めの字である。それは何故と云うと “*arihantā asarira* (無身者=*siddha*) *āyariyā uvajjhāya muni* (牟尼=*sādhu*) の夫々第一のシラブルを合することに依って *om* の語が生ずるが、これは *Pañcaparameṣṭhi* である,” と云う偈の説くように、第一の語の結合については (*arihantā* の *a* と *asarira* の *a*) “同じ音の合することによって長音となる” と云う法則 (で *ā* となりこれが *āyariyā* の *ā* と合する時) “後ちのものは脱落する” と云う法則 (で *āyariya* の *ā* は前の *ā* と合しても落ちてしまつて同じく *ā* である。この *ā* と *uvajjhāya* の *u* と合する時) “*u* の音とは *o* となる” と云う *sandhi* の法則により (全部の音は) *om* となる。(中略) これらの諸 *pada* は一切の呪文説の *pada* の中で本質をなすもので現世来世に於て望む結果を与えることの出来るものであることを知って後ちに、無限の智等の徳を念ずるものである言葉を出して誦すべし。同様に清浄な *upayoga* (精神作用) を実態とする (身口意の) 三護の状態で無言で禪思せよ (中略) “その他のものをまた師の教えによつて” と云うのは一万四千の量の *Pañcanamaskāragrantha* に述べてある順序に従つて *Laghusiddhacakra* *Bṛhatsiddhacakra* 等の *Deva* をあがめるものも区分非区分の三宝を尊崇する師に対する浄信によつて知つて禪思すべし。』

以上が *Vṛtti* の説明であるが、形からいって前の *Pañcaparameṣṭhi Dhyāna* を呪文化してそれを誦しつつ禪思するのであるが、これは明かに正統婆羅門系の *mantra* の影響をうけたものである。“*a si ā u sā*” の如きは *Chāndogya Upaniṣad* の *Tajjalām* を想起させ、作り方も考え方も同類である。また *om* の字は本来神秘的な *mantra* であるが、これが瑜伽派にも用いられていると同様に、*Jaina* の禪定にも用いられたのであるが、この場合 *Jaina* の方が借用したのであると云うことはその説明に於

て、siddha を aśarīra に、sāddhu を muni に変えて無理に om を五聖の意味にした点を見てもわかると思う。この外に hrām, hrīm, hrūm, hraḥ, yaḥ, kṣaḥ, phuṭ, raṃ, rīm, raum, raḥ, svāhā 等の mantra が用いられることは H. v. Glasenapp 氏も述べている (Der Jainismus p. 369)。この密教化は仏教のそれと合せ考うべきである。

2. Piṇḍastha Dhyāna.

これは前に出て来た Abhyantara-dharma-dhyāna の類に属するもので、現在の自己を中心とした禪定であるが、如何にも華麗な内容をもった観想である。幸いに Ghoshal の Dravyasaṃgraha 中にサンスクリット原文のみで訳はないが Jñānārṇava の説を挙げて居るのでそれを和訳してその内容を伺うことにする。

序 説

(2) Piṇḍastha は Vira (雄者) によって説かれた五つの dhāraṇā (心持) と知るべし、それ等に於て心を摂する人は (saṃyamin) 錯乱することなく生 (janma) の縛を断つ。

(3) それは順序の如く Pārthivi (地観) Āgneyi (火観) Svasanāvāt-hā (風観) Vāruṇī (水観) Tattvarūpavati (真理観) と知るべし。

(a) Pārthivi

(4) 行者は乳海を平面世界 (tiryag-loka = 上の天界と下の地獄界との間にある中央世界でこの中に我々の世界もふくまれていると考へる) と等しく、響きなく、動きなく、集れる霧の如く憶念する。

(5) その中に美しき形の、千瓣の蓮ありて無量の光明輝き出で、とけたる黄金の如き光あるを憶念する。

(6) (その蓮は) 蓮華の色あり、毛線かがやき、閻浮提の大きさにして、心をして蜜蜂の如くたのしましむ。

(7) その(蓮の) 上に黄金の山からなる美しき果皮を憶念する。それは輝き動く赤黛色の光網によって四方を橙色に色づけたり。

(8) その上に秋の月に似たる、高き hari 座あり。その座に自己の安楽に坐して、寂靜なるを思考せよ。

(9) そして自己は染と惡等のすべての汚れを滅するに堪え、また生存より生ぜる業の群を征するに心注げるを憶念せよ。

(b) Āgneyī

(10) 次に彼(行者)は不動の修習の後ちに、臍の壇上に、16の立瓣ありて快よき蓮の花 (kamala) を憶念す。

(11) (その蓮華の) karṇikā の上に大 mantra の震動せるをよく思考せよ。(その呪字は) 一々の花瓣の上に等しく置かれたる字母の花蔓によって飾られたり。

(12) そ(の大呪字)は r の記号を着け (repha-ruddha) 随韻の点 (kalabindu = anusvara 点) に飾られ、空無なる (śūnya) 字にして、輝く月の数 koṭi の光明によって照徹されて褐色の面をなす。

(13) その r の記号より出る火 (dhūmaśikhā) を憶念せよ。その後火花の連続を、また直ちに焰の系列を憶念せよ。

(14) その盛になりゆく焰の束によって開きたる、心臓に住する蓮華 (puṇḍarika) を賢者は喜びて焼く。

(15) そ(の蓮華)は八種の業の転変せるものにして、下に向けるを大 mantra 定より起りて強き火が焼く。

(16) 次に身体の外に三角の火曼荼羅が焰の束によって vāḍaba の火(地下の火)の如くもえたるを憶念せよ。

(17) それは火の種子(=黄金)に等しくなりて周囲に満字 (svastika) の記号をつけ、上空の風都に生ぜる煙なき黄金の火をなす。

(18) mantra の火は vahnipura (火都) の外と内とを焼く、それは音を立てて焼盛り、大焰光をなす。

(19) これは身体と蓮華とを灰の態になして燃焼するもの尽きて、火も漸くにして消え行く。

(c) Māruṭī,

(20) 天車の道を充して進みきたる風の大速力あり、大力あるを行者はたのしみて憶念せよ。

(21) それは他を動かし、天神を導くもの、諸天の住所を轟かし、雲の軍を紛砕して大海を震動せしむ。

(22) 世界の極みをめぐり、各方角の端に至り、 jagatkriḍa (?) に飛び行き地面の中に入る (を憶念せよ)。

(23) この塵 (身体の灰塵) は速かにその大風によって吹き立てられ、修習を堅固なるものになしたる行者は風を寂止に導くべし。

(d) Vāruṇī

(24) 実に福德ある者は Vāruṇī (定) に於て、雲の Indra の武器なる電光をならしつ、美観に充ちて、雲曼の隻りてなれるを憶念せよ。

(25) 醍醐の水よりなり、濃く、真珠の光をなす水滴をもって、沛然と間断なく降る (雲) を賢者は憶念すべし。

(26) さらに半月に等しく、 varuṇa (=太陽?) によって印づけられ、美しき都市なる雲が乳水の流れもて天空の面をただよわしむるを禅思せよ。

(27) この不可思議な力ありて輝ける禪定より生ずる水をもって、身体より生ぜるその灰塵を残りなく彼 (行者) は洗淨するなり。

(e) Tattvarūpavati

(28) 七の界より離脱し、満月の無垢の光明ありて、一切智者に似たる自己を抑制者は憶念す。

(29) その自己は獣王の座 (獅子座) に登り天の勝所をそなえ善と力とを有し、天神と阿修羅と蛇が尊崇するを (憶念せよ)。

(30) 次に総ての業の尽き、最勝無垢にして輝き自己の体と生胎のなくなりたる己が人間の型を憶念せよ。

以上は Jñānārṇava にある Piṇḍastha の説明であるが、要するに現実

の自己を対象として、それが解脱する過程を禪定中の想として憶念する Dhyāna で、地、水、火、風、色の五段階に分れている。即ち始めに自己の坐位を中心とし（地）、そこに坐する自己が arham と云う字の r の記号から出る火によって業が焼かれ（火）、その残りの灰が風に吹き飛ばされ（風）、業なき身は雨水によって清められ全く灰塵の残ることなく（水）、最後に解脱者としての自己を憶想するのである。

この解脱の順序を追う坐禅法はまことに立派な形式のものであると云うより外はない。仏教にも類のないものであるが、その順序を追う所は九想観に似、その頭に想を浮べる点は九想の外に大乘の観無量寿經の観法をも思い起させるものである。そのほか他教と関係ありと思われるものは (1) 臍から蓮が生ずると云うのは婆羅門系の神話で、(2) 八葉の蓮華を肉団心とし八業を現わすとするが、仏教の密教でも八葉の蓮華を用うことは周知のことである。(3) 其他 Svastika は先住民族の文化中に見出されるもので、仏教にも伝っているものであり、(4) Āgneyī は小乗の灰身減定を思起させる。

3. Rūpastha Dhyāna

吾人は残念ながらサンスクリット、プラークリット両文献のうちこの禪定を詳説するものを手にすることが出来なかったので原文の訳を示すことは不可能である。ここに、Ghoshal (Dravyasaṃgraha Appendix XVI) のかなり詳細なものと、Tatiya 氏 (Studies in Jaina Philosophy p. 286) の甚だ簡単なものを合せて考えてみると次の如くである。

Rūpastha Dhyāna は解脱者の arhat が解脱を欲求する大衆に囲まれて、宝石の座の上に坐し、十二人の Gaṇadhara、八人の室の番人に侍られている。彼は無限の偉大さと無限の徳と身は一koṭi 数の太陽の如く輝いて、天神に侍られている。すべての精神的の欠点から離脱していて法を説いている。これを禅思することである。

これはⅡ類の禪定の外法禪のうちの阿羅漢に対する禪定と全く同じであ

る。(Dravyasaṃgraha 第五十偈, 並に Vṛtti p.90, 4 参照)

4. Rūpātita Dhyāna

Tatiya 氏は上述の著 289 頁下段に Jñānārṇava XL, 16 の文を挙げて
いる。その原文と拙訳は次の通りである。

cid-ānanda-mayaṃ śuddham amūrtaṃ paramākṣaram |
smared yatr' ātmanātmanam tad rūpātitaṃ iṣyate ||

“その(禪定中)に於いて自己が心と喜よりなり清浄にして無身、最勝
にして不滅なるを自ら憶念せんにこれを Rūpātita と説く。”

これに依るとこの禪定はⅢ類中の Piṇḍastha の最後の部分と同じとす
ることが出来る。

結 語

以上述べ来たったところは裸行派の Nemicandra, Subhacandra, Brah-
madeva 等の著作を中心としての禪定である。裸行派のそれが古い伝統を
承け、また一方、その教理の変遷と共にその教理に相応した禪定を作り出
し、また一方には他の宗教にある禪定方法をそのままに受け入れた点もあ
ることが明瞭になった。

ここに取扱った禪定形式は Haribhadra の著 Yogaviṃśikā, Śodaśaka,
Yogabindhu, Yogadr̥ṣṭisamuccaya になるとますます拡大されていって、
段々ジャイナ教としての特長を失うようになるのであるが今はこれを述べ
る時間を有しない。

尚、上述のうち Ārta, Raudra, Dharma, Śukla の四禪定以外は裸行
派独自のもので、白衣派は教理的に合わないものであるから、同派では行
なわれていないものとする。また上述の総ての禪定以外に裸行派にも白
衣派にも伝わっている禪定でありながら禪定とされていないものに非常に
重要なものがある。本論文はこれを主として論究する目的であったが、そ
の序の形で終ってしまつて甚だ論究性の少ない拙論となつたのはまことに

残念である。然しその重要なものは近い将来に発表したいと考えている。また諸宗派間の禪定の比較についてはまだ禪定と解脱智、或いは神通神変との関係等の問題があるが、これをその折に必然的な関連として取扱われるはずである。

I 引 用 書

Suttāgama (Aṅga and Upāṅga of Jainas) 2 vol. Bombay 1954.

Aupapātika-sūtra. Leumann's ed. Leipzig, 1883.

Nemicandra, Dravyasaṃgraha.

Brahmadeva, Dravyasaṃgrahavṛtti.

Śubhacandra, Jñānārṇava.

以上三書は、GhoshalのDravyasaṃgraha (下に記載) の中に出版された或いは欄外に記入されたものを用いた。

Umāsvāti, Tattvārthādhigamasūtra. I Mody edition, with its Bhāṣya Bibl. Indica 1904. II Kāpādia ed. with its Bhāṣyaṭīkā 1930. III Jacobi's translation ZDMG Vol. 60. 1904.

Hemacandra, Yogaśāstra. E. Windisch, First 4ch. only (edition and tr.) ZDMG 28, 1874, 185~262.

Patañjali, Yogasūtrāṇi. I with its Bhāṣya. Ānandāśrama 47, 1919. II Translation, Woods. Harvard Oriental Series vol. 17, 1927.

II 参 考 書

Ghoshal (S. C.) Dravyasaṃgraha Sacred Book of the Jains Vol. 1. Arrah (India) 1917.

Glasenapp (H. v.) Der Jainism. Berlin 1925.

Schubring (W.) Die Lehre der Jainas, Grundriss III. 7. Berlin Leipzig 1935.

Tatiya (Nathmal) Studies in Jaina Philosophy, Banaras 1951.